



史記を読む (11月のごあいさつ)

平成28年11月1日(火)

11月になっても今年は夏を感じさせるような天気が続いています。

司馬遷の史記を約3年かかって読んだ。徳間書店発行の「史記8巻」を中心にして、中華書局の原文「史記 巻130」や中国の連環画、陳舜臣先生の「中国の歴史」なども参考にしながら、興味深いところは、原文を、中国人の先生に教わりながら読み終えた。漢文が好きだったので面白く読むことができた。

黄帝以来約三千年間の紀元前1世紀までの中国歴史はさすがに圧巻であった。改めて、「史記 巻130」を眺めると確かに流れは把握できたような気がするが、抜けた部分もありもう一度本格的に挑戦してみたい。

王朝の興亡からみると、**史記の世界は起・承・転・結**であった。王朝が確立し安定期に入るが、時が経つと変化がおとずれ、それが“**転**”となって社会は大混乱に陥り、新しい秩序が確立される。例えば、始皇帝の秦は楚の項羽と劉邦によって結末を迎え、混乱を収束した劉邦の漢が天下を統一する。漢の安定の中で幾つかの“**転**”が生じるが、最後の決定的な“**転**”は黄巾の乱に端を発する三国志の時代の始まりである。史記の中を生き抜く人物、特に“**転**”の時代の人々は、いつでも行動力があり生き生きとして独創的である。

司馬遷の史観、力の対立の中から新しい王朝が生まれるという弁証法的な描き方は、転換期の中で起きる事件が生き活きと時代を写し、現われては消えて行く人物は魅力的でとても親近感を覚える。そして歴史の中でその名をいつまでも記憶される。それは歴史のロマンである。

およそ50年毎に“**転**”の生ずる近代の目で現代の中国を見ると、毛沢東や周恩来たちの創った中華人民共和国は70年近くを経て、1回目の“**転**”の時期は鄧小平の改革によって克服したように感じる。“**転**”とは史記から見て、追いつめられた農民や国民の蜂起であり、それを克服するという事は安定を取り戻し継続するという事である。中国の歴史は興味深く、史記の次は**三国志**に挑戦しようと思っている。